

どの証言が残っている。⁶⁰ 柴山は同志の薩摩志士のため暗殺の名譽を主張しているが、これらの状況をみると清河がその暗殺を計画したあと、その実行を虎の尾を踏むことを怖れないメンバーに委任した、と暗殺後百三十三年の今、結論づけることができよう。全国各地の志士が虎尾の会に加わったにもかかわらず、暗殺そのものが薩摩出身の志士だけに委任されたのは興味深いことである。

この事実に関してはいくつかの理由がある。まず最初に、襲撃が行われた地点の付近には、三田二丁目、芝三丁目、高輪の三箇所が薩摩屋敷があった。暗殺者は薩摩屋敷で暗殺の準備をすることはできなくても、二十分以内の距離にある薩摩屋敷に襲撃後潜むことはできたであろう。一八六一年七月、暗殺に加わった二人の志士が高輪屋敷か九州に帰るようにと命ぜられたことはすでに榊山日記に見た。彼らが一月十五日から幕府の管轄権の及ばない高輪屋敷に潜んでいたという可能性は十分にある。更に、暗殺者の身元が幕府にわかっていたらならば、後の生麦事件と同様に薩摩出身の志士が藩から守られる可能性は高い。最後に、「虎尾の会」のメンバーは理想主義者ではあるが、ヒュースケン襲撃の成功はその襲撃者間の協力や連携にかかっていた。もし言葉の誤解や、他藩出身間の競争心などがあれば、その連携を成し遂げることはできなかった。

襲撃は完全に実行され、ヒュースケンは殺され、事件は初めに清河が予測した通り進行した。幕府の疑いの目は薩摩志士に向いていたが、江戸におけるその数が多かったため、清河は幕府の目付がお玉ヶ池の戸口に間もなくやって来ることを恐れる必要はなかった。しかし、結局清河は同年の春、江戸から逃走した。そこでヒュースケン暗殺に直接関わっていなかった「虎尾の会」のメンバー八人が小馬伝町の牢屋に入れられた。当時の暴力的な尋問の方法を以て、幕府は囚人から確実にヒュースケン暗殺に関する全ての情報を引き出せたとはいえない。暗殺に

直接関わっていなかった人々を釈放するための圧力が幕府にかかる以前に、逮捕された八人の内の四人が拷問で死亡し、さらに一人、清河の妾のお連という女性も釈放された当日に死亡した。

逃走中、清河はじっとしてはいなかった。逃避行中の経験についての長い漢文日記を書き、尊皇攘夷の宣伝もしていた。全国の志士と接触しつつ、ついには二三五人の浪士を召集し、一八六三年この勢力を従えて江戸に帰った。⁶¹ そこで幕府に特別攘夷部隊の形で、その小軍隊を雇うよう交渉した。多数の貧しい急進派や物騒なやっかい者を治めることができる利点を考慮し、幕府は清河の提案を承諾し、彼の支配下の浪人たちを雇うこととした。⁶² その時点から、清河の威信は目ざましく高まったが、彼が実際に幕府の命令に従い浪人部隊を使うことに協力するつもりであったかどうかは疑わしい。当然、幕府もその件を疑っており、清河の権力があまりにも大きくなる以前の段階で彼を消してしまった方が良からうと目論んでいた。

一八六三年五月三十日、清河は金子与三郎の招待を受け、五時間以上談論を交わし、酒肴でもてなされた。その帰途、一の橋で七人の幕府の家臣に襲われた。⁶³ この一の橋はヒュースケンが暗殺された中の橋から五〇メートルと離れてはいない。その殺人が単なる偶然であったのか、或いはヒュースケン暗殺の黒幕であった清河に対する報復であったのかは不明である。⁶⁴ 清河の死体はその晩斬られたままの状態で置き去りにされた。首は落ちかかっていたという記述もある。暗殺の噂を伝え聞いて清河の友人石坂周造（一八三二—一九〇三）は現場に急いだ。故意に「これぞ不倶戴天の仇」との声をあげ、清河の首を切り取り、死体の羽織にそれを包み、幕臣で浪士隊を支配していた剣士山岡鉄舟の自宅に運んだ。後に山岡は伝通院に然るべき墓を建てたそうである。

* * *

ヒュースケン暗殺は我々に電光のような速さで志士の世界の内側を覗かせてくれた。しかしその暗殺は志士の目を通してしか見ることができない。その後一八六三年に薩英戦争が、一八六四年には四国艦隊の下関砲撃が起こるまで、志士の意図は、明らかに戦争を誘発することであった。その同じ時期に幕府は志士を制し処罰しようとしていた。一八六二―一八六四年、最も過激な急進派の大多数が討幕の無益な反乱の中で死んだ。幕府と外国の攻撃の後に生き残った者たちは自らの政治計画を見直さなければならなかった。「尊王」の旗印は捨てなかったが、一八六四年以後、志士は取りあえず「攘夷」をやめた。それ代わる彼らの新しい政治計画は「富国強兵」というスローガンに要約された。一八六八年、このより洗練された新綱領に支えられて、幕府を倒すことやその権力を奪い取ることに成功し、志士は目的を達する名目上の頭として、日本国民全体の活動力の向かう焦点として、天皇を彼らの望んでいる位置に置くことに成功した。

ヒュースケン暗殺事件の現代的意義は、個人的悲劇である点を除いて、逆説的に言えば、死者そのものの重要性よりも暗殺者の精神を洞察することができるという点にある。志士の意見がどれほど保守的であったとしても、彼らは近代日本の英雄となった。因みに元の「虎尾の会」のメンバーを見てみると、明治後期に十五人の内七人が贈位されている⁶⁵⁾。この七人のうち少なくとも清河八郎と神田橋直助の二人はヒュースケン暗殺事件に係っていた。志士の理想が明治の日本全体の方向決定の原理となっていたのである。一八六八年当時、国民の主権が一応然るべくこの様に定められた後にも、今「近代日本」と親しみを込めて呼ばれている国家の成長はまだ「武士精神」に染れたものであった。外見的

には更に西洋に似て来た日本の国家の志には、西洋の国々が与えた屈辱に復讐し、凌駕するという執念があった。

注

- (1) 以下、日本旧暦は漢数字で表示す。
- (2) 残されている日本側の史料では襲撃者の数は幾分異なっている。東京大学史料編纂所蔵「大日本維新史料稿本」No. 0170/5/1224 (以降「維新稿本」と略す) 参照: 『肥後藩国事史料』には五、六人。同『万延筆記』には十二、十三人。同『雑書集』の近藤尚三郎の報告書には「芝赤羽根森本町刃罷通候御面体不相分侍之者巨澤上總介番所構町より四五人中之権より五六人抜連」。同芝南新門前「益田弥兵衛居書」には二十人、三十人。同「名主田中権左衛門居書」には三十人。
- (3) 東京大学史料編纂所蔵『統通信全覽』米國書記官「ヒュースケン」連書一件の部 (以下『統通信全覽』と略す) には「文久元年四月二十六日、当日附添シ後衛ノ士官罪科ノ宣告ヲ送致セル閣老ノ書翰」によると、「辻番人取放以來右奉公差權」辻番人新吉、善助、又六、辰右衛門は解雇されていた。「Papers Relating to the Foreign Affairs of the United States。」Washington: Government Printing Office, 1863, 798頁、同様。
- (4) 今宮新「ヒュースケンのことども」『史学』36巻、2/3号 (1963): 1-20。
- (5) Friedrich Albrecht Graf zu Eulenburg: "Ost-Asien 1860-1862." Berlin: Ernst Siegfried Mittler, 1900, 149頁。
- (6) John McMaster: "Sabotaging the Shogun. Western Diplomats Open Japan, 1859-69." New York: Vantage Press, 1992
- (7) 『統通信全覽』附録の「万延元年十二月欠日借馬渡世草旨ノ願書」。
- (8) 「維新稿本」の「雑書集」。
- (9) 『統通信全覽』附録の「万延元年十二月欠日借馬渡世草旨ノ願書」。
- (10) 『統通信全覽』には万延元年十二月六日普稱寺ニ於テ外國奉行ト公使ノ対談書。同じく、Wilhelm Heine: "Eine Weltreise um die nordliche Hemi-

- sphere in Verbindung mit der ostasiatischen Expedition in den Jahren 1860 und 1861." Leipzig: Brockhaus, 1864. 2巻、44頁。
- (11) [A. Berg.] "Die preussische Expedition nach Ost-Asien. Nach amtlichen Quellen." Berlin: R. von Decker, 1866. 2巻、151頁。
- (12) 「維新稿本」の「雑書集」。
- (13) Heusken "Japan Journal" 223頁。
- (14) 「維新稿本」の「雑書集」。
- (15) 当時の江戸に外国人医者にはドイツ人 Dr. Robert Lucius, イギリス人 Dr. Myburgとイギリス公使の Rutherford Alcock の三人がいた。
- (16) 以前の襲撃は一八五九年八月二十五日、横浜：ロシアの士官一人、乗組員二人。同年十一月六日回所：洋服を纏ったフランス領事の中国人下僕。一八六〇年一月二十九日、江戸の東禅寺門前：イギリス公使館の日本人通訳熊野の伝言。同年二月二十六日、横浜：オランダ商船長一人。同年三月二十四日、松田門外：太老伊井直弼。"Note on the Political Situation and State of Affairs in Japan." Public Record Office, F. O. 46/11号。
- (17) Henry Heusken: "Japan Journal 1855-1861." Jeannette C. van der Corput & Robert A. Wilson 訳。New Brunswick: Rutgers University Press, 1964. 223頁。
- (18) Dirk de Graeff van Polsbroek: "Journaal 1857-1870." Herman J. Moes-hart 編。Assen/Maastricht: Van Gorcum, 1987, 57頁。
- (19) J. K. de Wit: "Maandelijks verslag over December 1860/Januarij 1861" オランダ国立古文書館 Algemeen Rijksarchief: Kolonien 1067, Cons. Yoko. no. 3/40 と 3/81. 東京大学史料編纂所近世史料部の横山伊徳氏の提供に感謝を表す。
- (20) Heusken: "Japan Journal", 219-220頁。
- (21) その肖像は田中一頁『万延元年遣米使節図録』、東京：大正九年を参照。
- (22) "The First Japanese Embassy to the United States of America", Tokyo: The America-Japan Society, 1920, 207頁。
- (23) 東京大学史料編纂所編『大日本近世史料：柳亭補任』、東京大学出版会、1983年、6巻、5頁。

- (24) 日本人医者は二人 Berg, "Preussische Expedition", 148頁、名前は『続通信全覧』附録「万延元年十二月外日外国同調役並ノ商議書」に記載あり。
- (25) 『続通信全覧』上記引用文中「金一分クツ」とある。
- (26) Francis Hall: "Japan through American Eyes: The Journal of Francis Hall, Kanagawa and Yokohama, 1859-1866", F. G. Notehelfer 編。Princeton: Princeton University Press, 1992, 294頁。
- (27) クリスの報告書による、Heusken: "Japan Journal", 223頁。
- (28) A. Berg: "Die preussische Expedition" 2巻、148-151頁、Max von Brandt: "Dreiunddreissig Jahre in Ost-Asien. Erinnerungen eines deutschen Diplomaten." Leipzig: Georg Wigand, 1901, 130-31頁、Heine: "Eine Weltreise", 2巻、42-60頁。
- (29) Brandt: "Dreiunddreissig Jahre", 130頁。
- (30) Berg: "Preussische Expedition", 148頁。
- (31) August Eulenburg 使者の息子、Freiherr von Richthofen 地質学博士、Max von Brandt 使者の随行者、A. Berg 画家、W. Heine 製図家兼芸術家。
- (32) Berg, 上記注(29) 引用文中。
- (33) Heine, "Eine Weltreise", 44頁。
- (34) 東京大学史料編纂所所蔵マイクロフィルム「検死報告書」"Despatches from U. S. Minsters to Japan at National Archives, Yedo January 22 nd 1861, Enclosure no. 1 with dispatch no. 3 dated January 22 nd 1861."
- (35) Lucius, 上記注(33) 引用文中。
- (36) Heine: "Eine Weltreise", 51-52頁。
- (37) Heine: "Eine Weltreise", 46頁。
- (38) Richard S. Patterson: "Henry C. J. Heusken, Interpreter to the First American Consular and Diplomatic Posts in Japan." "The foreign Service Journal" 24巻、7号(1947年7月)、14頁。ホノルルのオリヴァー・スタンレー氏の提供に感謝を表す。
- (39) Eulenburg: "Ost-Asien", 150頁。
- (40) Hall: "Japan through American Eyes", 295頁。
- (41) オランダ領事 De Witt によると、当時江戸には六百人の浪人がいた。

- (42) Marius Jansen: "Sakamoto Ryoma and the Meiji Restoration." Princeton: Princeton University Press, 1961, 95頁。
- (43) 小山松勝一郎『清河八郎』東京: 新人物往来社、1974, 103頁。
- (44) Payson Jackson Treat: "The Early Diplomatic Relations between the United States and Japan 1853-1865." Baltimore: The John Hopkins Press, 1917, 164頁。
- (45) Oliver Statler: "Shimoda Story." New York: Random House, 1969, 566-570頁。
- (46) Hall, "Japan through American Eyes", 299頁。注(33)をも参照。
- (47) Oliver Statler: "Shimoda Story" 上記引用文中。墓碑は宮永孝「開国の使者ーハリスとヒュースケンー」『雄松堂』1986, 199-200頁。
- (48) Oliver Statler: "Shimoda Story" 上記引用文中。
- (49) 「維新稿本」の「柴山愛次郎日記」。
- (50) 注(47)に同じ。
- (51) 『明治維新人名辞典』97頁。
- (52) 「伊牟田がこの時使用した刀は、三善長光作と伝える無銘の長さ二尺の物。八郎は早速もらい受け、文久三年春白鞘に改め、その鞘に次の文を書きつけた。伊牟田真風、米國訳虜を赤羽に屠りし刀なり。文久癸亥の春、磨きて更にその室を修す。壯士冠を衝く故事在り。吾が皇の徳義、威盛ならんと欲す。尺余り短剣、醜虜を屠る。殉国の名声、海内に轟く。醜ひとを斬り屠りてし秀の剣、御国の後の宝なるらん」小山松勝一郎『清河八郎』東京: 新人物往来社、1974, 112頁。
- (53) 『明治維新人名辞典』122-3頁、勝田孫弥「薩摩藩士伊牟田尚平略史」『史談会速記録』158号(1905)、安藤良平「国事執筆者の映像ー伊牟田尚平についてー」『跡見学園女子大学紀要』23号(1990): 25-37頁。
- (54) 「維新稿本」清川八郎の『樽中紀事』にも記載されている: 「薩摩八兵衛為薩郎勇士、固與吾深相結者、曾與真風等斬譯虜於赤羽根、足以知其為人也。」
- (55) 「維新稿本」の「樺山實之日記」。
- (56) 『明治維新人名辞典』1049頁。
- (57) 斎藤治兵衛「清川八郎君国事尽力の来歴」『史談会速記録』105号(1901年

- 6月): 13-24頁。小山松勝一郎『清河八郎』。
- (58) 山岡鉄舟と松岡万。
- (59) 清河八郎『西遊草』、小山松勝一郎編、東京: 平凡社、1969。東洋文庫140号、256-7頁。
- (60) 清川が殺された時、「ようやくヒュースケン暗殺者は死刑になった」という噂が日本在住の外国人の耳に入った。Von Sieboldの"Open brieven uit Japan"にあり、Hallの日記(1863年6月13日の記入)にも記載されている。アメリカ公使はイギリスのスパイ・ネットワークから同じ情報を得ていた。従って、清川の名は当時のアメリカ政府出版物にも出る: "Message of the President of the United States and Accompanying Documents to the Two Houses of Congress at the Commencement of the First Session of the Thirty-Eighth Congress." Part II, Government Printing Office, 1864, 1101頁。
- (61) Conrad Totman: "The Collapse of the Tokugawa Bakufu." Honolulu: University of Hawaii Press, 1980, 48, 92-3頁。
- (62) 小山松勝一郎『新徳組』国書刊行会、1976。
- (63) その名は佐々木只三郎、遠見又四郎、高久安次郎、永井寅之助、広瀬六兵衛、依田鉄次郎、徳永登、小山松『清河八郎』、220-21頁。
- (64) 清川の殺人についての噂はHall, "Japan through American Eyes" 1863年6月13/15日、小山松『清河八郎』、212-222頁。
- (65) すなわち、清川八郎正四位、神田權直助従四位、美玉三平従四位、安積五郎従四位、池田徳太郎従五位、北有馬太郎従五位、石坂周造従五位。田尻佐『贈位諸賢伝』国友社、1926。

[付記] 本稿は、1992年3月22日、南麻布の光林寺にあるヒュースケンの墓前において、アメリカ、ドイツ、オランダ在日諸大使臨席のもとに行われた記念儀式の後の講演を日本語に翻訳したものである。なお、この研究にあたり在日オランダ大使ロランド、ミケ・ヴァン・デン・ベルグ夫妻、前在日オランダ大使館文化担当官マリオン・ベンニク氏には大変お世話になった。また、東京大学史料編纂所の宮地正人教授にはご指導を賜り、五野井隆史教授、松井洋子助

手、武中明子氏、鈴木邦子氏には翻訳に際して貴重なご助言を頂いた。なお、ヒュースケンの記念の儀式と講演とは在日オランダ大使館の文化担当官クリスチナ・ヤンセン氏と日蘭協会、日本航空との協力によって実現できたことを付記し、併せて心から感謝の気持を表したい。